



【5】近世の名古屋2…⑦蕉風発祥地 ⑧宗春の治世

1 江戸時代の名古屋

近世、江戸時代の名古屋で誇りうるものには何を取り上げるべきでしょうか。テーマが多様なため、いくつかの名古屋本から拾ってみると12項目ほどの候補が出ました(図1)。

事 項	概 要 説 明	備 考
熱田宿	日本最大の宿場	量的評価
新田開発	広大な干拓事業	量的評価
広小路	珍しい都市の広場	①
蕉風発祥	芭蕉の俳句のスタート点	②
宗春の治世	ユニークな経済政策の主張	③
有松絞	東海道一の名物	④
鸚鵡箋中記	江戸初期の社会描写	文献情報
新川掘削	日本有数の長さの河川掘削	量的評価
枇杷島市場	日本三大市場	量的評価
北斎漫画	漫画のルーツ?	⑤
出版と貸本	トップクラスの文化産業	⑥
徳川美術館・蓬左文庫	貴重な御三家の宝物の保存	資源保存

図1 江戸時代の名古屋で、全国に胸を張れそうなこと

これらの中で、物語という視点から、単に量が大いとか、存在することが中心とかいうものを外すと、次の6項目になります。

- ①広小路：都市の広場
- ②蕉風発祥：俳句の誕生地
- ③有松絞：東海道一の名物
- ④宗春の治世：小さな政府論

⑤北斎漫画：漫画のルーツ?

⑥出版と貸本：文化産業

これらを見ると、とくに名古屋が誇り、主張したいのは、②と④ではないでしょうか。②の蕉風発祥は、俳句という芸術の登場と名古屋が大きく関わっていたことを示すものです。また、④は派手で財政を破たんさせたという評価もある七代藩主宗春ですが、それを政策面から再考しようとするものです。

なお、⑤は漫画のルーツとみることもできるのですが、漫画というものの定義次第のところもあり、少し課題があります。

一方、①の広小路は江戸広小路のコピーのようで、また③の有松絞も元は九州の絞り技術からのようです。⑥の出版・貸本事業は、永楽屋が北斎を育てたり、大惣は貴重な文献が保存できることにもなりました。しかし前述の北斎の話を除くと、少し物足りないのかもしれません。

したがって、名古屋の江戸時代の遺産としては、②の蕉風発祥と④の宗春の治世を中心に、⑤を検討し、その他として残る3項目を補足しておきたいと思います。

2 名古屋と文化

(1)蕉風の発祥…俳句芸術の誕生地

松尾芭蕉は、俳諧を芸術の域に高めた人として、俳句の祖ともされています。ところが、その芸術性が表に出たとされるのが、名古屋での句会です。

1684年の秋、41歳の芭蕉は、後に『野ざらし紀行』と呼ばれる旅に出て、大垣から熱田を経由して名古屋城下に入りました。そして名古屋の俳人五人と俳諧の会が開かれました。芭蕉は、発句に、

狂句 木枯らしの身は竹斎ににたる哉
と詠んでいます。その時の俳諧は、芭蕉の最初の選集である『冬の日』としてまとめられ、それが芭蕉の句風である、「蕉風」の始まりとされているのです。

そして、その選集をまとめた荷弓(かけい)という人は、江戸門人を差し置いて、名古屋で「芭蕉七部集」のうちの前半の三集をまとめることになりました。

芭蕉と名古屋との係わりは、名古屋城下だけではなく、熱田や鳴海にも及びます。とくに鳴海には芭蕉は何度も訪れ、1687年の時の句会では、

星崎の闇を見よやと啼く千鳥
と詠み、自ら筆を執って「千鳥塚」と名付ける碑を作りました。これは生存中唯一の、しかも自筆の碑という貴重なものです。鳴海の連衆は、奥の細道などの紀行のパトロンでもあったといえます。

この芭蕉が、名古屋を意識する重要な要素がもう一つありました。若い愛人・杜国です。『冬の日』の連衆の一人で、才能もあったようで、芭蕉のお気に入りでした。彼が商売の罪で渥美半島に流された時は、わざわざそこを尋ね、

紀行文	年齢	行程の概要	概期間	名古屋立寄
野ざらし紀行	41歳	江戸-伊賀-尾張-奈良-尾張-江戸	8ヵ月	往路・帰路
鹿島詣	44歳	江戸-常陸-江戸	1ヵ月	
笈の小文	44歳	江戸-尾張-三河-伊賀-伊勢-関西-	8ヵ月	往路2回
更科紀行	45歳	-尾張-木曾路-信州-江戸	2ヵ月	往路
おくのほそ道	46歳	江戸-陸奥-出羽-越後-加賀-美濃	6ヵ月	

図2 芭蕉の主な紀行文。
40歳代前半に集中し、名古屋との係わりも大きい

鷹一つ見付てうれし いらご崎
と詠みました。その後、伊勢で合流した二人による秘密の関西地方の旅が、紀行文『笈の小文』の後半になっています。名古屋は、芭蕉文学の中心となる40歳代の前半に、大きな影響を与えた都市だったということができるのです(図2)。

(2)宗春の治世…「小さな政府」論

徳川吉宗が八代将軍に就いてから17年後、尾張七代藩主、徳川宗春が誕生しました。吉宗は、当時、享保の改革の真っ最中で、幕府の体制強化と緊縮政策を進めていました。ところが尾張宗春は、それに真っ向から反するように、規制緩和の政策を始めたのです。穏やかではありませんでした。

その政策は、藩士に配った著書『温知政要』に書かれます。その中では、「慈」と「忍」を常の心の戒めにするとしつつも、規制が多いのはよくないとか、倭約ばかりではいけないと、吉宗の政策に反論しています。そして、①自ら派手な衣装で街を歩き、②祭りや盆踊りを復活し、③芝居を推奨し、④遊郭を許可するなど、活性化と規制緩和策を進めたのです。当然、名古屋の街は活気に満ち、京・大阪の賑わいを取るほどだったといえます。

しかし、当然のことですが、3年、5年と時が経つと、政策の行き過ぎが目立ってきます。宗春がその修正を図り始めた頃、その弱点を突いて、幕閣は付家老の竹腰等と組んで反撃に出ました。それが家臣のクーデターに

なり、さらには蟄居命令へとつながることになったのです。治世は8年で終わることになりました。

宗春の政策は、浪費が多く藩の財政を悪化させたと批判されます。しかし一方、税率を上げ、農民から搾り取った税で幕府の財政を立て直した吉宗が評価されるわけではありません。宗春が及ばなかったところは、世の中を活気づけ、財の巡りを良くしたにもかかわらず、それから財源を得ることに、政策が及ばなかったからなのです。

しかしながら、規制を強化しようとする幕府に真っ向から規制緩和で対抗したこと。18世紀にすでに、今日でいう「大きな政府」論に対する「小さな政府」論を主張した先見性をこそ、もっと評価すべきではないでしょうか。

(3)北斎漫画…漫画のルーツ？

葛飾北斎は、名古屋の弟子の牧墨僊宅（栄のラシック辺り）に、長期に滞在したとき、三百枚もの沢山の絵図をかいていました。その絵の面白さに着目したのが版元をしていた永楽屋東四郎で、絵手本の『北斎漫画』として出版されました。漫画とは「漫ろな画」という意味でしょうか。今日の漫画のルーツだという説もあります。（残念ですが、一般的にいうるか自信がなく、この項は保留にします）

この出版は大当たりで、その後、没後まで発行が続く、15編に及ぶベストセラーになりました。北斎は、そのPRで、大須の南の西本願寺掛所（西別院）で畳120畳の紙に大きな達磨を画くパフォーマンスもしています（図3）。また、富嶽三十六景の中に、わざわざ名古屋からの「尾州不二見原」という図を入れたのも、出版社サービスだったのでしょうか（図4）。北斎芸術と名古屋は強く結ばれていたことが分かります。

北斎の絵は、国内のみならず、ヨーロッパ



図3 北斎が西別院でやったパフォーマンス。大達磨を描いている（尾張名所図会）



図4 北斎の「富嶽三十六景」の一つ。中区富士見町からの「尾州不二見原」

の画家にも影響を与えたといわれますが、北斎漫画には、かのゴッホもびっくりしたといえます。

(4)その他

<広小路>

広小路は、万治の大火の後、火事の延焼防止策として道路が拡幅されたものです。しかし、北西風が卓越する名古屋を考えると、位置が少しおかしいことに気が付きます（図5）。

実はその3年前に江戸では「明暦の大火」があり、当時、上野や両国などでいくつかの広小路が作られていたのです。尾張藩主光友は、江戸に居て名古屋の復興を指導したといえます。そのため、江戸広小路を見習ったのに、その意味が正しく伝わらなかったのではないのでしょうか。

広小路は、最初は寂しいところだったとい

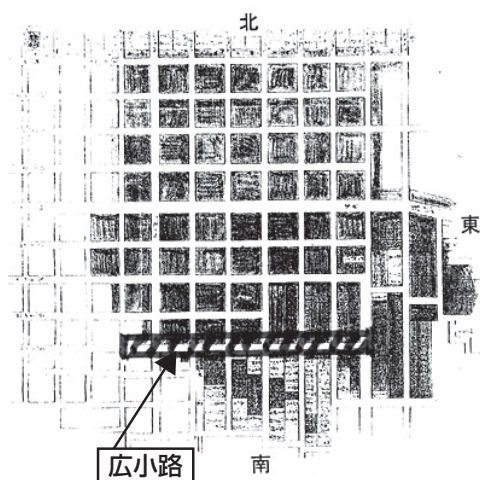


図5 万治の大火で焼けた区域と広小路

います。しかし社会が成熟すると、都市にも娯楽の場が求められるようになり、広小路は碁盤割地区の市民の息抜きの場になりました。予期せぬ「都市の広場」ができたのです。しかし明治20年、区間が名古屋駅まで延伸された時、広場は消え、広小路「通」に変わることになりました。

<有松絞>

有松は、東海道の鳴海宿と知鯉鮒宿の宿場間の山林が寂しいからと、藩が指導してつくられた村です。しかし耕地がありませんでした。そこで村民が探し当てた産業が、「絞り」でした。そのきっかけは、鳴海と有松では説明が少し違いますが、いずれも九州の絞り技術が伝わったもののようです。そして東海道を歩く人たちの土産になり、大名間でも評判になり、ついには将軍自らが店に入って絞りを選ぶような名所になりました。

有松は宿場ではなかったため宿はなく、街には絞りの商店が並びました。その蔵の家並みは東海道一美しいともいわれ、広重は東海道53次の中で、その町並みを描いています(図6)。近年、住民の長期にわたる保存への努力が実って、4大都市で初めて、国の重伝建地区に指定されました。



図6 広重の「東海道五十三次」の鳴海宿の図。
有松の町並みが描かれている

<出版と貸本>

江戸時代中頃の名古屋は、前述の永楽屋のほかにも、芭蕉が句会を開いた風月堂や、美濃屋、菱屋など結構大きな本屋がありました。その中で注目したいのは、18世紀後半に開業した版元の「永楽屋」と貸本の「大惣」です。

永楽屋東四郎は、前述しましたが、北斎漫画の前に、本居宣長の『古事記伝』を出版しました。江戸に支店を出して、大店と競うほどだったといえます。

いま一つの大惣(大野屋惣八)は、貸本業を始めました。そして、2万冊を有する全国でも最大の貸本屋になりました。その本は、明治時代に廃業する時、東大、京大や現在の国会図書館に何千冊と譲られ、今日でも貴重な文献として保存されています。

3 紀行 芭蕉の足跡

… 名古屋に残るいくつかの史跡 …

名古屋に残った芭蕉の足跡を訪ねてみましょう。芭蕉は、何回も名古屋を訪れ、それも長期に滞在したことが多いため、その足跡はたくさんありますが、ここではその中から三カ所を尋ねてみます。

<テレビ塔：蕉風発祥の地>

地下鉄の久屋大通駅南改札口をでて、地下

街の26番出口を出ると、右側にテレビ塔が大きく見えます。その東北の足の手前に、石碑があります。そこが、「蕉風発祥の地」とされる所です。



テレビ塔の脚下にある「蕉風発祥の地」の碑。
この地から俳諧の芸術化が始まった

芭蕉は、1684年秋、熱田から名古屋城下に入り、ここで名古屋の若手俳人達と句会をしました。記録では、宮町筋久屋町から西入の南側で、連衆の一人、岡田野水が借りた家でした。集まった若手は、借宅を提供した野水(商人)、リーダー格の山本荷兮(医者)の他に、加藤重五、坪井杜国、小池正平の3人です。杜国は、米屋の20代の若主人でした。

碑は、俳諧師の控え帳をデザインしたもので、表面に芭蕉を筆頭に連衆6人の歌が記されています。この時の名古屋を中心としたメンバーで詠まれた句が、すぐまとめられました。そして芭蕉の推薦を経て『冬の日』として出され、蕉風のスタートとされることになりました。その重みを感じつつ、バックして地下鉄で伝馬町駅に向かいます。

<熱田：林桐葉宅>

伝馬町駅の1番出口を出て、Uターンして国道を西に進みます。4本目の道が、熱田神宮の参道です。右に曲がると右側すぐのところの石垣の上に案内板があり、「林桐葉宅跡」とあります。今は狭くなっていますが、元は間口75間という大きなお屋敷だったといひます。

桐葉は、大垣の木因と仕事のつながり等があり、俳人仲間でもありました。その縁で、



熱田神宮の正面にあるは林桐葉宅跡の案内板。
林家は信長の家来、林道勝の家系だった

芭蕉は熱田を基地に、名古屋城下や鳴海に門下を広げました。もちろん、芭蕉は熱田の俳人たちとも句会を開き、熱田社を尋ねるなど熱田と芭蕉は深くつながることになりました。伝馬町の交差点に戻り、左に進むと名鉄の神宮前駅があります。ここから名鉄で鳴海に向かいます。

<鳴海：千鳥塚など>

鳴海駅を降り、改札を出て階段を下り、右の出口です。右手の道を進むと扇川に出ます。右に川に沿って進み、2つ目の橋を渡ってそのまま進むと、鳴海宿の真ん中で、鍵の手と呼ばれる交差点です。鳴海宿は、東海道の熱田の隣の宿場です。複雑な交差点のすぐ右側に、細い道が寺に向かっています。入るとその右側は大きなお屋敷です。ここが、芭蕉が訪れた時に「知足亭」とされている下郷家です。ここを拠点に、芭蕉は何度も鳴海を訪れ、長期間滞在しています。鳴海は、芭蕉にとって



鳴海の下郷知足亭のあった所。
今も大きなお屋敷が残る

本当に心安らぐところだったのではないのでしょうか。

街道に戻って、右に進みます。少し行くと交差点があり、その右向こうに誓願寺というお寺があります。ここは下郷家の菩提寺で、奥に進むと、左手に芭蕉堂があり、その手前に小さな、「芭蕉翁」と彫られた石碑があります。この碑は、芭蕉が亡くなって1か月後に造られた芭蕉最古の供養碑とされるものです。



鳴海・誓願寺の奥にある芭蕉最古の供養碑。
なくなった1か月後につくられた

街道を進むと、道は右に曲がります。しばらく行くと右側に丹下の常夜灯があり、ここで宿場を出ます。さらに進むと、鳴海山下の交差点に出る手前の右側に、山に上る細い道があります。見上げると、三王山の斜面が見えます。その道を、喘ぎながら登ると、千鳥塚公園の入り口になり、さらに頂上まで頑張ると、左手の大きな楠の木の下に、ひっそりと、「千鳥塚」があります。芭蕉自身が字を書き、生存中に建てられた唯一の貴重な碑です。



芭蕉生前唯一の碑である「千鳥塚」。
三王山の上に静かに立っている



その横の遊園地からは、句にあった星崎がよく見える

隣接する公園からは、千鳥の句となった星崎方面がよく見えます。目をつぶって芭蕉の句を実感したら、公園の東にある車路を下り、そのまま道路を進むと鳴海山下の交差点で、北側にバス停があります。

4 市民の文化度

江戸時代の名古屋は、戦国時代とは打って変わって、「文化」に関する事項が目につきます。

芭蕉が俳諧を芸術の域に高めた『冬の日』は名古屋の若い仲間との句会でした。宗春が小さい政府論を書いた背景も名古屋の街でした。北斎が描いた絵を評価し出版したのも名古屋人です。その他にも、十辺舎一九が『東海道中膝栗毛』をまとめた時、「名古屋通人の皆様とお付き合いさせていただいたお陰で完成しました」という礼状が近年発見されたといえます。

こう見ると、江戸時代の名古屋は、突出した人材を出すというよりも、広く、市民の文化度、いわば教養が極めて高かったと推定できます。名古屋の「芸どころ」は中級の藩士や碁盤割の商人によって守られてきたといいますが、名古屋の街の近世は、まさに市民の文化の時代だったといえるのかもしれませんが。

〈主な参考文献〉

- ①嵐山光三郎『芭蕉紀行』（2004、新潮文庫）
- ②服部徳次郎『尾張の芭蕉門人』（1984、竹中書店）
- ③大石学編『規制緩和に挑んだ名君』（1996、小学館）